



世紀転換期の日本近代建築に関する研究 ー武田五一と第二世代の建築家の思想と作品ー

足立, 裕司

(Degree)

博士 (工学)

(Date of Degree)

1992-10-02

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙1670

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2001670>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・(本籍)	あ だち ひろ し 足 立 裕 司	(兵庫県)
博士の専攻分野の名称	博 士 (工学)	
学位記番号	博い第66号	
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当	
学位授与の日付	平成4年10月2日	
学位論文題目	世紀転換期の日本近代建築に関する研究 — 武田五一と第二世代の建築家の思想と作品 —	

審 査 委 員	主査 教授	多 淵 敏 樹	
	教授	嶋 田 勝 次	教授 金 谷 弘

論 文 内 容 の 要 旨

明治末から大正にかけて、我が国の建築界は未曾有の変化に見舞われる。鉄やコンクリートといった新しい材料の登場ばかりでなく、アール・ヌーヴォーやウィーン・セツェッションなどの西欧の新しい造形運動の影響、そして明治維新以来の欧化主義に対する反動としての日本独自の様式の探究など、様々な変化がおこったのがこの時代である。

この転換期ともいえる時代を担ったのが、明治初頭生まれの建築家達である。本論文ではこの世代を第二世代と位置づけ、江戸末期に生まれ日本の近代洋風建築の移入、すなわち様式主義を信条とした第一の世代と区別している。第二世代はまた、明治中頃に誕生した第三世代とも区別される。第三世代は大正末から昭和にかけて活躍し、いわゆる「帝冠様式」と通称されている傾向やモダニズムを直接担った建築家達である。第二世代は、言わばこの二つの大きな思潮に狭まれ、従来あまり正当な評価を得ていなかったと思われる。しかし、最初に日本の建築的伝統に目覚め研究し始めたこと。その成果を建築表現に取り込み、日本独自の様式創造を目指したこと。様式主義からの最初の変化とも言うべき「アール・ヌーボー」「セセッション」と呼ばれる流行をつくりだしたこと。「造家」を「建築」という概念で置き換えることによって学問的な礎を築いたこと等々、この世代の果たした役割は他の世代に比べ優るとも劣らない。

本論文ではこの第二世代が果たした役割を、武田五一という一人の建築家の思索とその足跡を辿ることによって考察していこうとするものである。武田五一はウィーンで興っていた Secession 運動の日本への最初の紹介者として知られる反面、日本の伝統の復興——いわゆる”日本趣味”と呼ばれる傾向の先導者の一人に挙げられる建築家である。彼のまわりには伊東忠太や長野宇平治、古宇田實、

大熊喜邦、岡田信一郎など、同様に一方で日本趣味、他方 Secession などの新しい西欧の動向に理解を示した重要な建築家を取り巻いており、同世代の考え方を知る上でも重要である。さらに、武田は議院建築建設という当時の建築界最大の問題に深く関与していたのみならず、図案から建築に至る幅広い領域で活躍するなど、理論と実践の両面で注目すべき働きをした人物である。彼の足跡を辿ることによって、当時の「セセッション」の活きた様相、つまり日本のアール・ヌーヴォー、若しくは「近代日本の建築」の転換期の思想を理解するための一つの指標が得られると思われる。

本論は第1章において武田五一の建築観の形成を彼の生い立ちを辿りつつ、残された彼の論考等から探っている。とくに在学中の研究である「茶室研究」や「建築形式」の研究がその後の設計活動の基本となっていることを解明した。

第2章では、日本の近代建築史上でもエポックを画したと言われる、武田五一と西欧のアーツ・アンド・クラフツ運動、アール・ヌーヴォーとの邂逅を神戸大学建築系教室に保管されている旧蔵品から探り、彼の「アール・ヌーボー」や「セセッション」についての考え方を明らかにした。

第3章では、第1章、第2章で得られた知見をもとに、武田五一の建築作品の展開とその建築観を探っている。ここでは、従来見過ごされてきた彼の初期作品である「京都府立図書館」の再解釈を行い、後の作品がこの作品からの展開として位置づけられること、さらに、この建物の実測調査等を踏まえながら、彼の設計手法として重要な役割をもつ比例論の具体的な利用方法を明らかにした。さらに、当時の我が国の最大課題であった帝国議事堂の設計で要求されていた日本の表現へと至る彼の思想の過程を考察した。

第4章では、武田五一の設計活動において最も重要な領域であったと思われる住宅作品の分野を、明治末からの日本の住宅の歴史に沿いながら位置づけ、彼の試みた和洋折衷住宅の先駆的な役割を指摘した。

さらに第5章では幅広い武田五一の足跡の全容を知るために、以上の各章では取り上げることの出来なかった事績について、特に重要と思われる F.L.ライトとの関係、和風建築等に言及した。しかしながら、もとより武田五一の幅広い活動の領域を網羅するまでには及ばず、なかでも図案の分野は他分野の研究者に委ねることとした。

第6章は、日本の近代建築史上における第二世代の建築家の役割と特徴を、武田五一の建築観や作品と比較しながら検討している。特に、武田五一がすでに留学中から関心を抱いていた西洋建築・東洋建築における木造から石造への歴史的発展という建築史観と伊東忠太の「建築進化論」との共通性を明らかにすることから、第二世代の「日本趣味」の背景にある建築思想を探っている。その具体的な表明の機会であった「我邦建築の将来を如何にすべきや」という建築学会主催の討論会での主張が、その直後に行われた「大阪公会堂競技設計（現中之島公会堂）」に具体的に結実していることに注目し、その分析を行った。「建築進化論」から「日本趣味」への展開、その具体的様相についての検討はこれまでなされておらず、重要な知見であると思われる、第二世代の建築観を総合的に把握する一助となったと考える。

なお、武田五一の作品の全容は、昭和62年4月に行われた博物館明治村での「武田五一・人と作

品)展で初めて公表され、彼の活動が広く理解される契機となった。その後、武田五一に対する幅広い関心に支えられ、東京池袋のセゾン美術館における『日本の眼と空間展Ⅰ』『日本の眼と空間展Ⅱ』、またロンドンのバービカン・ギャラリーと東京の世田谷美術館で行われた『日英交流展』でも主要作品が展示される機会を得ている。

論文審査の結果の要旨

日本の近代建築史上、これまで消極的な評価しかなされてこなかった明治末から大正期にかけての世紀転換期の動向を、武田五一と第二世代の建築家達の具体的な事跡を辿りながら総合的に考察した論文である。

まず、武田五一という建築家が、西欧の世紀転換期の建築・造形運動をどのような経緯から日本に伝えることになったかを検討し、また、その可能性を日本という土壌に如何にして根付かせようとしたのかを考察している。とりわけ、当時の建築的状况にあって、広くアール・ヌーヴォーと呼ばれる西欧の傾向のなかから、特にその後期現象ともいえるウィーン・ゼツェッションに注目し、日本の伝統的な造形との融合を目指したことについて、彼の建築思想に基づきながら解明している。そこから得られた知見としては、

- 1) 西欧のアール・ヌーヴォー自体に日本の影響がみられたことから、当時の日本の建築家が逆に自己の建築的伝統の可能性とその継承の方向を見いだしたこと。
- 2) 既に西欧の歴史的建築様式を吸収し、独自の建築様式を模索しはじめていた当時の日本の建築界に対し、彼の紹介した「セセッション」が重要な示唆を与えることになったこと。

の2点が挙げられる。

さらに、これらの論旨を踏まえ、武田五一と同世代の建築家である第二世代の建築家達に言及し、この世代の建築思想を良く解明している。なかでも、建築の歴史を木造からの発展として捉えようとする「建築進化論」の作品への具体的な反映を検討することによって、この世代が担った日本の世紀転換期の建築動向を、新たな視点から再構築しなおしている点で注目される。また、本研究は、大正から昭和初期にかけての建築界を担った第三世代の「日本趣味」の背景を明らかにする上でも重要な示唆を与えるものとして評価される。

以上より、本研究は建築学について、その世紀転換期の日本の近代建築史、特にその中心的建築家である武田五一及び第二世代の建築家の思想と作品を研究したものであり、重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。

よって、学位申請者足立裕司は、博士(工学)の学位を得る資格があると認める。